我がふるさと相馬を偲ぶ，そして未来を思う

中央技術株式会社　企画開発室　主任　三品　智和

我がふるさと　：　私の故郷は福島県相馬市です。相馬市は浜通り地方に属し、宮城県との県境付近に位置します。なかでも松川浦は相馬市の代表的な観光スポットで、海苔やアサリの養殖が盛んなところです。相馬市には高校卒業まで住んでおり、幼少時代にはよく海水浴をしに自転車で磯部や原釜に行ったり、家族で潮干狩りをしに松川浦に行った思い出があります。その思い出の地を津波は一瞬して消してしまいました。

津波で激変　：　東日本大震災では、報道の通り大津波によって海側の地区(磯部・原釜)が壊滅的な被害を受けました。この眼で被災地を見たのは震災後50日のことでしたが、あまりに酷い現状を目の当たりにすると、ただ呆然と眺めているしかなく、ここでの思い出が消えてしまいそうな気持ちにさせられました。津波というものは、押し寄せる際には果てしなく内陸側に遡上して建物や樹木を押し流し、引いた後は一面土砂や瓦礫で覆いつくします。そして、早春の田園風景を一瞬にして暗色に変えてしまうのです。

卸売市場に座礁する船(相馬市原釜)

被災地のいま　：　いま学生時代の同級生が中心になって、市民有志によるボランティア団体(走馬会)を立上げ、精力的に支援活動を行っていることをブログで知りました。そこで、社内で支援物資を募り、それを届けに再び被災地に行ってきました。走馬会の活動は、被災者のペットの世話や仮設住宅者への炊き出し、あるいは修学旅行の中止を余儀なくされた中学生への自主修学旅行の募金活動など、まさに地元目線で考えた活動です。同級生に被災地の現状を聞きましたが、多くの方々の支援に感謝する一方で、相馬に来てありのままを見てもらい、被災地に何が必要かを考えてもらうことも今後の復興に役立つとの意見がありました。よりよい相馬への復興を遂げるためには、多くの方々の知恵を求めているのです。

地元中学生との募金活動（上野公園）

未来を思う　：　原発問題は、よりよい相馬の復興を妨げようとしています。現実問題、浜通りを縦貫する道路・鉄道は原発の20km圏内を通らざるを得ないため、いまなお通行できません。阿武隈山地で隔たれた浜通りにとって、この縦貫道は重要なライフラインです。そこで、重要な鍵を握るのが港湾の整備ではないかと思います。浜通りには相馬と小名浜に重要港湾があり、この港湾を核にしたインフラ整備が物資の輸送をより一層活発にし、ひいては地域発展と企業誘致による雇用増加に繋がるものと考えています。特に相馬港は仙台から100km内に位置するため、東北と関東を結ぶ重要な懸け橋となることでしょう。

いまのところ原発問題に収束の兆しは見えませんが、復興のためにはある程度、原発を受け入れることが必要になるかもしれません。再び元気な相馬市、そして浜通り地方を取戻し、未来の人たちに繋げていくために私ができることを考えていこうと思います。